通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
1	第2233号	肺癌症例のデータベース構築による臨床・病理学的因子のレトロスペクティブ解析	肺癌外科治療の術式、合併症、予後を把握し治療手技の評価等を行うためにデータを集積して、データベース化を行い今後の治療に活用する。	肺癌 昭和49年1月1日～ 平成24年10月25日	1,400例	平成24年11月6日	平成30年3月31日	外科学 （呼吸器外科） 中村　治彦
2	第2304号	関節リウマチ（RA）における感染症のリスク因子についての検討	MTXを第一選択薬とし、生物学的製剤を早期に導入することにより、感染症のリスクが増加している。感染率の高さにはRA自体の病態、疾患活動性、治療が関係しているとの報告もある。入院を必要とするRA患者における重度感染症のリスク因子を研究し、重度感染症の減少につなげる。	関節リウマチ 平成19年4月1日～ 平成24年3月31日	500例	平成24年12月22日	平成32年3月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 永渕　裕子
3	第2496号	僧帽弁複合体と大動脈弁複合体の解剖学的関係性が心機能に及ぼす影響についての後ろ向き研究	近年、高齢化に伴い大動脈弁狭窄症患者数と心血管系の有害事象（突然死など）発生頻度が増加傾向にあり、発症後、放置すると致命的となる場合がある。大動脈弁狭窄症では大動脈弁置換術が推奨されているが、近年では僧帽弁と大動脈弁が解剖学的・形態的に影響し合っていると報告されている。僧帽弁と大動脈弁・線維性組織を併せてMitral-Aortic　valvular coupling（MAC）と呼ぶ。大動脈弁狭窄症では僧帽弁逆流が多く存在するが、僧帽弁形成術・置換術の追加判断はしばしば困難であり、エビデンスも少ない。また近年はカテーテル治療も本邦に導入予定であり、これら評価法の確立は大変重要な課題と考える。本研究は、3次元心エコー検査を用いて正常者及び大動脈弁狭窄患者のMACの評価を目的とする。	大動脈弁狭窄症患者 比較対象者：正常者 平成21年4月1日～ 平成25年8月6日	110例	平成25年8月19日	平成29年12月31日	内科学 （循環器内科） 出雲　昌樹
4	第2528号	胃切除術患者の術式による栄養評価について	胃切除術患者は手術により大きな侵襲を受け、絶食期間を経た後に徐々に食事を開始するが、食事摂取状況は個人により差がある。今回、胃切除術患者の術後期間内の食事摂取量を調査し、必要栄養量に対する充足率を求め、術式による栄養摂取充足率および体重変化率等や栄養状態のちがいについて調査したいと考えた。	胃癌のため胃の手術を行った患者 平成22年4月1日～ 平成25年8月31日	50例	平成25年9月11日	平成31年8月31日	栄養部 【西部病院】 清水　朋子
5	第2571号	人間ドックにおけるホルター心電図による心室遅延電位測定の意義	重症不整脈の予知に関する心室遅延電位測定は保険適応となり、ますます臨床での評価が高まっている。健診センターでは心室遅延電位測定可能なホルター心電図を使用しており、通常のホルター心電図結果に加え1日を通した心室遅延電位測定が可能である。通常のホルター心電図ではわからない不整脈の予知が期待できる。そこで今回、H24年に当院人間ドックのオプション検査であるホルター心電図を施行した結果をコンピューター解析する。心室遅延電位の有無を確認し、今後人間ドックでの検査項目としての有用性を検討する。	H24年にホルター心電図を施行した人間ドック受診者 平成24年1月4日～ 平成24年12月28日	69例	平成25年11月14日	平成29年9月30日	内科学 （循環器内科） 原　正壽

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
6	第2583号	鉄キレート薬Deferasiroxによる腎機能障害・尿異常の縦断的調査	Deferasirox懸濁用錠（エクジェイドR）は頻回の赤血球輸血による慢性鉄過剰症に対して投与される鉄キレート剤である。我々は本剤の内服開始後に腎機能悪化を認め、Fanconi症候群と診断し得た症例を経験したが、文献的にもそのような腎機能に与える影響を示唆する報告が相次いでいる。しかし、本邦における報告はほとんどないため、当院でのDeferasirox使用患者における腎障害の状況を把握する。	骨髄異形形成症候群、 再生不良性貧血、 骨髄線維症 平成22年1月1日～ 平成25年11月30日	20例	平成25年12月9日	平成30年3月31日	内科学 （腎臓・高血圧内科） 柴垣　有吾
7	第2718号	特定健診からみた高齢者における動脈硬化性疾患の病状推移	特定健康診査（以下、特定健診）の65歳以上の受診者を対象者とし、高齢者に対する健康診断の効率性に関して検討することを目的とする。本研究を行なうことにより、高齢者に対する健診について新しい施行方法の検索や、高齢者における動脈硬化性疾患治療への基盤となる可能性がある。	期間内の特定健診の65歳以上の受診者 平成23年4月1日～ 平成26年3月31日	2,000例	平成26年4月28日	平成30年3月31日	内科学 （総合診療内科） 鳥飼　圭人
8	第2809号	ANCA関連血管炎の臨床像と長期予後の解析	血管炎とは血管壁に炎症をきたす病変であり、多彩な臨床症状・疾患群を血管炎症候群と呼ぶ。血管炎はサイズにより大・中・小型等に分類され、免疫複合体性の血管炎のほか、病変部位に免疫複合体が検出できないPauci-immune型の血管炎があり、顕微鏡的多発血管炎（MPA）、多発血管炎性肉芽腫症（GPA）、好酸球性多発血管炎性肉芽腫症（EGPA）の3疾患がある。この3疾患はともに肺・腎の小型血管を好んで侵し、障害組織への免疫複合体沈着に乏しく、、抗抗中球細胞質抗体（ANCA）がしばしば検出されるなどの共通点が多くみられることから、総じてANCA関連血管炎と呼ばれる。 　欧米と比較して、我が国では前述のMPAが比較的高頻度に見られ、また高率に間質性肺炎をはじめとする様々な肺病変を合併することが知られている。しかし、欧米諸国では肺病変の合併は稀であるため、MPAの肺病変に関する報告は少ない。 　本研究はMPAを中心とした肺病変に注目し、その他の臓器病変と共にその特徴・治療反応性・予後などを明らかにする。	ANCA関連血管炎 平成21年4月1日～ 平成26年6月30日	150例	平成26年9月9日	平成30年3月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 松下　広美

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
9	第2816号	脊髄小脳変性症の小脳堆積の経時的変化と臨床症候との対比に関する研究	脊髄小脳変性症は小脳と脊髄を中心とした神経変性疾患の総称である。近年、遺伝子診断により様々な型に分けることが可能となってきたが、進行を抑制しうる治療法は未だ確立されていない。MRIなどの画像診断が進歩した今日、脊髄・小脳の経年的萎縮を観察することは可能であるが、萎縮の進行と臨床症候、病型との対比に関する研究はほとんどない。MRIの経時的観察による萎縮のスピードや萎縮部位から日常動作の低下、寝たきりとなる時期、経管栄養を要する嚥下障害の出現時期等、早期に予測できれば、治療介入が容易となり、本疾患の治療法の向上に寄与すると考えられる。 　以上よりこれまで我々が入院あるいは外来で治療を行なってきた脊髄小脳変性症患者の臨床データを後方視的に調査し、施行されたMRIの小脳体積を計測して、臨床症候の経時的変化との対比を行なうこととした。 　本研究は小脳および大脳の脳萎縮の速度と臨床症状との相関を明らかにし、脊髄小脳変性症の病型別脳萎縮の年間萎縮率を計測し、年間萎縮率や小脳の実体積から日常生活動作低下の予測、寝たきりとなる時期、経管栄養を要する嚥下障害の出現時期、気管切開を要する時期などの主要な転帰を予測できるか、その可否について明らかにする。	脊髄小脳変性症 平成16年1月1日～ 平成26年8月24日	180例	平成26年9月9日	平成30年3月31日	内科学（神経内科） 長谷川　泰弘
10	第2861号	子宮頚癌傍大動脈転移症例に対する放射線治療成績の検討	子宮頚癌傍大動脈転移は遠隔転移であり予後不良とされるが、近年骨盤領域に加え傍大動脈領域を含む拡大した照射域への放射線治療により、長期生存例が報告されるようになった。今回、この拡大照射野への放射線治療の効果と安全性の検討を目的として、当院における治療成績を遡及的に調査する。	根治目的で放射線治療を行った傍大動脈リンパ節転移をもつ子宮頚癌症例 平成19年1月1日～ 平成25年12月31日	20例	平成26年10月27日	平成30年12月31日	放射線医学 五味　弘道

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
11	第2862号	循環器疾患患者における入院期および回復期以降の 心臓リハビリテーション進行に関わる要因に関する研究　～合併症をはじめとする臨床背景因子の影響を考慮して～	本邦では、心臓リハビリテーション（以下心リハ）の進行にあたり、「心大血管疾患におけるリハビリテーションに関するガイドライン2012」が制定されているが、その基となる研究報告の多くは、安定期にある循環器疾患患者を対象とした検討であり、急性期の心リハ進行に関わる明確なプログラムは確立されていない。また、回復期以降の心リハにおいても、有効な効果指標や、継続率を向上させるような介入手段については、未だ不明な点も多い。さらに、超高齢化が進行している本邦では、合併症罹患により重複障害を呈する心リハ患者の割合が増加しているため、合併症に伴うリスクや特異性に対応した心リハプログラムの確立が必須である。本研究の目的は、（1）循環器疾患患者における入院期および回復期以降の心リハ進行に関わる要因について、（2）年齢や重複障害をはじめとする臨床背景因子の影響について明らかにすることである。本研究成果により、従来の集団的心リハプログラムに加えて、テーラーメイド型の介入を視野に入れた、より効果的な指導方策を導き出せる可能性がある。	当院救命病棟およびハートセンターに入院し、リハビリテーション依頼があった循環器疾患患者（急性心筋梗塞、狭心症、心不全、大血管疾患、開心術後）のうち、各評価項目が測定できた連続症例 平成20年1月1日～ 平成26年9月29日	200例	平成26年11月5日	平成29年9月29日	リハビリテーション部 木田　圭亮
12	第2877号	Non-vitamin K antagonist oral anticoagulants（NOACs）内服中に発症した症候性頭蓋内出血例の臨床的検討	本邦では2011年3月にNOACsであるダビガトランが、非弁膜症性心房細動患者における虚血性脳卒中および全身性塞栓症の発症抑制を適応とし発売されて以来、順次、リバーロキサバン、アピキサバン、エドキサバンが使用可能となった。これらは出血合併症が稀少とされるも使用頻度増加と共に頭蓋内出血例が散見されるようになってきたが、その臨床的特徴の報告は少ない。本研究ではNOACs内服中に発症した症候性頭蓋内出血例の臨床的特徴をワーファリンと比較し明確化することを目的とする。	NOACsまたはワーファリン内服中に発症した症候性頭蓋内出血 平成23年3月1日～ 平成26年9月30日	6例（NOACs） ＋32例（ワーファリン） 計38例	平成26年11月25日	平成30年3月31日	内科学 （神経内科） 秋山　久尚
13	第2879号	多発性硬化症に対するフィンゴリモド導入例における有効性と安全性の長期的評価	世界で2010年、本邦でも2011年11月に認可された多発性硬化症治療剤であるフィンゴリモド（ジレニア／イムセラカプセル）の使用頻度が、この3年間に徐々に増加し、フィンゴリモド導入例における長期的有効性と安全性の再評価が必要な時期となってきている。しかし、適応疾患が多発性硬化症のみと限定的であり、臨床的効果や副作用の蓄積も十分でないのが現状である。これに鑑み、当院でフィンゴリモドを導入した12症例を対象に有効性と安全性の長期的評価を調査し、今後の同薬使用の注意点探索・評価を目的とする。	フィンゴリモドを導入した多発性硬化症 平成23年11月1日～ 平成26年9月30日	12例	平成26年11月25日	平成30年3月31日	内科学 （神経内科） 秋山　久尚

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
14	第2896号	脳卒中症例の屋内歩行自立に関連する因子の検討 -急性期病院退院時評価による検討-	脳卒中発症後の回復期リハビリテーション終了時の屋内歩行自立の可否は、在宅復帰を考える際の重要な因子である。脳梗塞後の歩行自立度には機能障害、能力障害、高次脳機能障害などの多くの因子が関連しているが、発症後早期よりその可否に関連する因子を明らかにできれば、急性期リハビリテーションにおける重点目標も立案しやすい。しかし、この因子についての報告は少ない。本研究は、急性期リハビリテーション退院時評価から、回復期リハビリテーション終了時の屋内歩行自立の可否に関連する因子を明らかにすることを目的とする。	急性期脳血管障害 平成21年4月1日～ 平成26年9月30日	1,200例	平成27年1月13日	平成30年3月31日	リハビリテーション室 【東横病院】 八木　麻衣子
15	第2898号	関節リウマチ患者におけるMTX関連リンパ腫の解析	関節リウマチを発症した患者は初回治療として7-8割がMTXの投与を受けているが、MTX投与症例の中には悪性リンパ腫を発生することが知られている。MTX関連リンパ腫は通常の悪性リンパ腫とは異なり、MTX中止により軽快することがある。本研究では、当科における関節リウマチ患者におけるMTX関連リンパ腫症例についてその臨床的特徴を明らかにするために、解析を行う。	MTX関連リンパ腫、対照群として関節リウマチ 平成16年4月1日～ 平成26年11月30日	MTX関連リンパ腫50例、 関節リウマチ50例	平成27年1月6日	平成29年11月30日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 永渕　裕子
16	第2899号	乾癬性関節炎の臨床的特徴の解析	乾癬性関節炎は乾癬にリウマチ反応陰性の関節炎が伴う疾患で、皮膚症状が先行しない症例があり、関節リウマチとの鑑別が重要な疾患である。当科の乾癬性関節炎の臨床的特徴を解析し明らかにする。	乾癬性関節炎、関節リウマチ 平成16年4月1日～ 平成26年11月30日	乾癬性関節炎50例、 関節リウマチ50例	平成27年1月6日	平成29年11月30日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 永渕　裕子
17	第2900号	単関節炎の関節リウマチの臨床的特徴の解析	関節リウマチは対称性多関節炎を特徴とするが、単関節炎の関節リウマチの存在も報告されている。関節リウマチのACRの分類基準が改訂され、早期関節リウマチの早期診断、早期治療介入のため、単関節炎でも関節リウマチと診断できる症例が増えている。本研究は、単関節炎の関節リウマチの臨床的特徴を解析する。	関節リウマチ 平成16年4月1日～ 平成26年11月30日	単関節炎50例、 多関節リウマチ50例	平成27年1月6日	平成29年11月30日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 永渕　裕子
18	第2944号	自己免疫疾患（ベーチェット病、強直性脊椎炎等）における観察研究	自己免疫疾患については罹患率が稀であることから、大規模な観察研究が難しい。本学は自己免疫疾患患者が多く、大規模・長期にわたる診療が行われていることから、予後・治療経過について疫学調査を行う。	自己免疫疾患（ベーチェット病、強直性脊椎炎など）とその対象疾患 平成16年4月1日～ 平成26年2月1日	300例	平成27年3月5日	平成31年3月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 大岡　正道
19	第2953号	BPPV病型におけるROM療法の効果の差異について	良性発作性頭位めまい症（BPPV）患者に対しては、運動療法が施行されることが多い。Rolling-over maneuver（ROM）は非特異的運動療法としてBPPVの病型にかかわらず有効であるといわれているが、それを評価した研究は少ない。今回、BPPVの病型によってROMの効果に差異があるかどうか評価する。	良性発作性頭位めまい症 平成26年1月1日～ 平成26年12月31日	200例	平成27年3月18日	平成30年3月31日	耳鼻咽喉科学 肥塚　泉

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
20	第2965号	当科における急性虫垂炎の検討	小児の急性虫垂炎は成人に比べ重篤化することが多い。しかし、患者は自分の症状などを訴えることが困難で、身体診察なども制限される。今回、小児の急性虫垂炎症例において術前検査で術後合併症を予測できる因子が挙げられないか検討を行い、今後の周術期管理の指針とする。	急性虫垂炎 平成18年1月1日～ 平成27年3月31日	668例	平成27年4月9日	平成30年3月31日	外科学 （小児外科） 脇坂　宗親
21	第2983号	Low grade DCISに対する術後放射線照射の有効性に関する後ろ向き検討	日常の臨床では、DCIS症例に対して乳房部分切除後には通常、残存乳房への放射線照射を行っているが、組織型・年齢・病変の広がりの範囲・異型度・切除断端からの距離などを参考に、照射を省略することがある。本研究では、当科でのDCIS症例に対する術式や照射の有無とその予後に関する後ろ向き検討を行う。	非浸潤性乳管癌（DCIS）と診断され、手術が施行された症例 平成16年1月1日～ 平成24年12月31日	550例	平成27年4月23日	平成30年12月31日	外科学 （乳腺・内分泌外科） 小島　康幸
22	第2984号	進行・再発乳癌に対するEribulinの使用状況についての後ろ向き検討	Eribulinは乳癌治療において、アンスラサイクリン、タキサン系の薬剤を既使用の症例で、再発した際に有効性が期待される薬剤である。本邦では再発1stから使用が認可されているが、欧州ではEMAが301,303試験の検討結果を統合解析したevidenceに基づき、Eribulinの2nd lineからの使用を認めるなど、使用状況には地域差が生じている。Eribulinの承認後より、当院ではEribulinを用いた治療実績を重ねてきたが今後、前向き試験実施を検討している。その際の参考とするため、本研究では現在までに得られた診療情報から使用状況と有効性について後ろ向きに検討を行う。	進行・再発乳癌と診断され、Eribulinが投与された症例 平成22年4月1日～ 平成27年3月30日	90例	平成27年4月23日	平成30年12月31日	外科学 （乳腺・内分泌外科） 小島　康幸
23	第2993号	大腸鋸歯状病変に対する拡大内視鏡診断の有用性についての検討	近年、大腸鋸歯状病変、特にSSA/Pは、散発性大腸癌の約15%を占めるMSI陽性癌の前駆病変として注目されているが、比較的新しい疾患概念であり、その内視鏡診断や臨床的取扱いに関しては一定のコンセンサスが得られていないため、大腸癌のサーベイランスを行う上で今後、鋸歯状病変に対する内視鏡診断を確立することは重要課題である。本研究では、当院にて切除された大腸鋸歯状病変の内視鏡所見と病理診断を対比し、特徴的な所見を明らかにする。	内視鏡、もしくは外科的に切除された大腸鋸歯状病変群 平成20年1月1日～ 平成23年9月30日	118例	平成27年5月13日	平成30年3月31日	内科学 （消化器・肝臓内科） 【多摩病院】 石郷岡　晋也

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
24	第3024号	高安動脈炎と巨細胞性動脈炎の治療の現状とその有効性と安全性に関する観察研究	本研究は厚生労働省難治性疾患克服研究事業難治性血管炎の大型血管炎の研究班の中で行う臨床研究である。平成19年4月1日から平成26年3月31日の間に高安動脈炎あるいは巨細胞性動脈炎と診断された患者で、新たにステロイド療法が開始された症例あるいは再発例に対してプレドニン（PSL）0.5mg/kg以上を開始した患者あるいは生物学的製剤の投与が新たに開始された患者を対象とする。登録された患者に関して（1）これらの疾患の人口統計学的特徴と疾患特性、（2）実施されたステロイド療法、免疫抑制剤の内容と寛解導入率、再発率、予後、（3）ステロイド治療の安全性、有害事象の発現状況を後方視的に検討する。	高安動脈炎、巨細胞性動脈炎 平成19年4月1日～ 平成26年3月31日	10例	平成27年6月23日	平成32年3月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 山田　秀裕
25	第3043号	センチネルリンパ節転移陽性・非郭清乳癌の予後に関する後ろ向き研究	乳癌におけるセンチネルリンパ節生検（sentinel node biopsy、SNB）はアイソトープ法から始まり、20年が経過した。SNBは臨床的リンパ節転移陰性（NO）乳癌において腋窩リンパ節転移を正確に診断できる生検法であることが検証され、転移陰性であれば非郭清でも予後が変わらないことが証明されている。さらに近年、微小転移や少数のリンパ節転移例に対しても非郭清の適応が拡大しつつある。今回、術中迅速病理検査で偽陰性となり、結果的に非郭清となったpN1mi（sn）乳癌またはpN1（sn）乳癌を対象に、集学的乳癌治療における非郭清の妥当性を検討するため、SNB後の非郭清症例を後ろ向きに集積し、その予後を解析する。	原発性乳癌 平成20年1月1日～ 平成23年12月31日	20例 （全体200例）	平成27年7月27日	平成31年3月31日	外科学 （乳腺・内分泌外科） 津川　浩一郎
26	第3059号	COPDにおける気管支拡張薬が肺血管体積に与える効果の検討	COPDは閉塞性換気障害を来す疾患であり、治療には抗コリン薬や長時間作用型β2刺激薬の吸入を行う方法がとられているが、呼吸機能や画像所見における改善効果は乏しい。血管体積と換気障害との相関を示す報告はあるが、本研究ではCOPDに対し、薬物治療による自覚症状の改善と呼吸機能及び肺血管体積の関係についての評価を行う。	20歳以上の未治療のCOPD患者において、薬物治療開始前と開始後半年以内にCTを施行したもの 平成25年7月1日～ 平成27年6月30日	20例	平成27年8月6日	平成29年6月30日	内科学 （呼吸器内科） 竹村　仁男
27	第3129号	外脛骨障害による成人期扁平足の診断と治療	外脛骨障害は日常診療で遭遇することが多い疾患であるが、保存療法に抵抗する例も少なくない。また、扁平足との関連性や、外脛骨障害に対する手術療法についても未だ確立されていない。本研究では、成人期の外脛骨障害症例の後脛骨筋腱-外脛骨-ばね靱帯複合部の鏡視およびMRI所見から扁平足変形への進展について病態を考察することと、外脛骨前進骨接合術の術後成績について検討を行う。	外脛骨障害 平成17年4月1日～ 平成27年7月30日	30例	平成27年10月13日	平成31年3月31日	整形外科学 仁木　久照

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
28	第3143号	当院における糖尿病治療に関連した重症低血糖発症時の実態調査	糖尿病患者の慢性合併症の阻止には、より厳格な血糖コントロールが必要であり、薬物治療の進歩によりその目標は徐々に達成されつつあるが、一方で薬物治療に関連した低血糖のリスクが増大する危険も危惧される。重症低血糖は発症時に第三者を巻き込む事故の誘因となる可能性があり、可及的に回避すべき重要課題である。本研究では、当院における重症低血糖発症時の背景等を調査し、療養指導の充実化を図ることが目的である。	重症低血糖を発症した糖尿病症例 平成23年4月1日～ 平成26年3月31日	左記期間内に重症低血糖を発症した糖尿病症例全例	平成27年10月13日	平成31年3月31日	内科学 （代謝・内分泌内科） 加藤　浩之
29	第3153号	高安動脈炎と巨細胞性動脈炎の治療の現状とその有効性と安全性に関する観察研究	本研究は厚生労働省難治性疾患克服研究事業難治性血管炎の研究班として実施する研究である。平成19年4月1日から平成26年3月31日の間に高安動脈炎あるいは巨細胞性動脈炎と診断された方の中で、新たにステロイド療法が開始された症例あるいは再発例に対してプレドニン（PSL）0.5mg/kg以上を開始した方あるいは生物学的製剤の投与が新たに開始された方を対象とし、（1）疾患についての人口学的特徴と疾患特性、（2）実施されたステロイド療法・免疫抑制剤の内容と寛解導入率・再発率・予後（3）ステロイド治療の安全性、有害事象の発現状況を後方視的に検討する。	高安動脈炎、巨細胞性動脈炎 平成19年4月1日～ 平成26年3月31日	10例 （全体：高安動脈炎200例以上、巨細胞性動脈炎200例以上）	平成27年11月27日	平成34年10月31日	皮膚科学 川上　民裕
30	第3154号	虫垂炎に対する虫垂切除術を中心とした治療方針の妥当性の検討	虫垂炎は外科手術による治療が中心となるが、炎症の軽度な症例では保存的治療、膿瘍形成性虫垂炎に対しては急性期に保存的治療を行い、炎症改善後に手術を行うinterval appendectomyの方針を選択することも多い。本研究ではこれらの治療成績について後方視的に解析を行い、現行の治療方針の妥当性を検討する。	入院治療を行った虫垂炎症例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	500例	平成27年11月4日	平成30年3月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎
31	第3155号	膵体尾部切除術における手術手技および周術期管理と合併症発生の関係	膵体尾部切除術は合併症の一つである膵廔の発生が多い。各施設で様々な工夫を行っているが、合併症の発生率は未だ十分に軽減できていない。膵廔は入院期間の延長や、生命危機に至る可能性をも含む合併症であるが、発生率は10～20%とされている。本研究では膵切離方法による膵廔の発生率の差異や、膵切離法以外の膵廔発生因子を後方視的に検討する。	膵体尾部切除術を施行後に、膵廔・SSIなどの合併症が発生した症例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	120例	平成27年11月4日	平成30年3月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎
32	第3156号	膵頭十二指腸切除術における手術手技および周術期管理と合併症発生の関係	膵頭十二指腸切除術は過大な侵襲を伴う術式であり、合併症も多い。各施設で様々な工夫を行っているが、合併症の発生は未だ十分に軽減できていない。術前栄養管理やシンバイオティクス、リンパ節郭清範囲、出血量や手術時間、膵空腸吻合手技、消化管吻合手技、予防抗菌薬、術後管理（Enhanced recovery after surgery）などの因子と術後合併症の発生との関連性について、後方視的に検討する。	膵頭十二指腸切除術を施行後に、膵廔・SSI・胃内容排泄遅延・胆管炎・脂肪肝などの合併症が発生した症例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	260例	平成27年11月4日	平成30年3月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
33	第3157号	腹腔鏡下胆嚢摘出術に関する検討	腹腔鏡下胆嚢摘出術は良性の胆嚢疾患に対する標準的な術式である。従来、同術式には臍に11～12mm、心窟部・右季肋部および右側腹部に5mm、計4本のポートを用いていたが、近年ではreduced port surgery（ポート数を減らす）を実施することも多い。しかし、reduced port surgeryは整容性に優れるが、手術侵襲を軽減できているかは未だ議論がなされている。本研究では当院における腹腔鏡下胆嚢摘出術の治療成績を後方視的に解析し、reduced port surgeryについて検討する。	腹腔鏡下胆嚢摘出術症例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	500例	平成27年11月4日	平成30年3月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎
34	第3158号	胆嚢炎に対する胆嚢摘出術の施行時期に関する検討	胆嚢炎に対しては外科手術が治療の中心となっているが、炎症の程度や患者の基礎疾患（抗凝固剤内服など）により、緊急手術・待機手術・胆道ドレナージ後の順緊急手術など手術時期は様々である。2015年に胆嚢炎・胆管炎の診療ガイドラインが発行され、おおむねガイドラインに沿った治療方針がとられているが、個々の症例における手術のタイミングについては施設間で若干の差があるのが現状である。本研究では当院における胆嚢炎症例の治療成績を後方視的に解析し、現行の治療方針が妥当であるか検討する。	入院治療を行った胆嚢炎症例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	500例	平成27年11月4日	平成30年3月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎
35	第3165号	重症型原発性アルドステロン症の診療の質向上に資するエビデンス構築	アルドステロン産生腺腫（PA）の病態・病型は多様であるが、その約10%を占めるPAは、軽症型である特発性アルドステロン症と比較してアルドステロン産生量が多く、標的臓器障害の頻度、予後の面からも重症型PAに位置づけられており、特異的な病型診断と効果の高い治療方針の確立が必須である。本研究では重症型PAの治療効果を高めるため、後方視的な検討を行い、（1）非観血的な検査のスコア化で病型予知が可能か、（2）副腎静脈サンプリング（AVS）の標準的な実施・判定法は何か、（3）手術・薬物治療の内、いずれの治療効果が高いかについて、3つの主要クリニカルクエッション（CQ）を解決し、診療ガイドライン改訂に資するエビデンスを構築する。	PAと診断され、原則としてAVSを実施された症例 平成18年1月1日～ 平成26年12月31日	100例 （全体1,500例）	平成27年11月10日	平成33年12月31日	内科学 （代謝・内分泌内科） 方波見　卓行
36	第3168号	舟状骨骨折の疫学調査および骨折形態、治療法の検討	舟状骨骨折は初診時に診断が困難な場合があり、患者の放置、医療者の見落としもしばしば散見されることがある。新鮮骨折ではスクリュー固定が標準的な治療になりつつあるが、舟状骨の特殊な形態から、その手術手技は決して容易でない。不適切なスクリュー固定、治療時期の遅れにより偽関節に陥ると、再手術や骨移植、血管柄付き骨移植が必要となり難渋する。診断においても単純X線画像では周囲手根骨との重なりにより正確な診断に習熟を要することから、早期診断・早期治療が原則であるが、このことは偽関節に陥る症例を減少させることにもつながる。以上から、本研究では舟状骨骨折における受傷機転・患者背景・診断方法・治療方法について後方視的に調査し、より正確な診断法、骨折形態の把握、適切な治療選択基準を見出す。	舟状骨骨折、舟状骨偽関節症例 平成19年1月1日～ 平成27年9月30日	100例	平成27年11月24日	平成29年9月30日	整形外科学 内藤　利仁

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
37	第3186号	再発子宮体がんの最適な治療法を探索するための後方視的研究	子宮体がんは増加傾向にあり、本邦での発生数もこの10年間で2倍以上となっているが、半数以上が低悪性度であることから、予後は良好である。ただし、再発率は低いものの、再発すると一般的に根治は難しく、子宮体がん治療ガイドラインでは患者の状態や再発部位、初回術後の補助療法の有無・内容によって手術療法や放射線療法、ホルモン療法、化学療法、支持療法を適宜、選択することとされている。子宮体がんの術後再発の好発部位は膣、骨盤内、腹腔内、遠隔臓器であり、現在は多くの施設で化学療法が行われているが、化学療法施行後の再発における、薬剤選択の明確な基準となるエビデンスはまだない。このため、本邦における初回治療後の再発子宮体がん症例の再発様式や時期、再発部位、施行した各種治療法の有効性、有害事象について、多施設後方視的調査研究で調査・検討を行い、再発子宮体がん患者に対する適切な治療アプローチに役立てる。	再発子宮体がん 1)組織学的に子宮体がんであることが確認されている症例 2)2005年1月1日以降に治療を開始し、2012年12月31日までに初回治療を終了した症例 3)2014年12月31日時点で再発が確認された症例 平成17年1月1日～ 平成27年4月1日	50例 （全体150例）	平成28年02月09日	平成30年03月31日	産婦人科学 細沼　信示
38	第3188号	外傷性膵損傷に対する治療方針に関する検討	外傷性膵損傷は、頻度は少ないが救命率が低く、難治性のものである。損傷の程度と全身状態によって、保存的治療や内視鏡的膵管ドレナージ、緊急手術の方針をとるが、画一した治療方針はなく、施設ごとで異なるのが現状である。当院で経験した外傷性膵損傷の症例を検討し、当院における治療方針の妥当性について検討する。	外傷性膵損傷例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	10例	平成27年12月14日	平成30年03月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎
39	第3189号	特殊型膵癌における臨床病理学的特徴に関する検討	膵臓癌の多くは管状腺癌であるが、約2%に腺扁平上皮癌を、また0.2%に退形成癌を認める。これらは特殊型膵癌と呼ばれ、まれな組織型の膵癌である。特殊型膵癌は管状腺癌と比べ大型で発見されることが多く、膨張性発育を呈し、やや血流が多い腫瘍として画像所見でとらえられる。また管状腺癌より予後不良と報告されている。しかし、症例数が少ないため生物学的特徴は未だ不明な点が多い。当院で経験した特殊型膵癌の症例について臨床病理学的検討を行い、その特徴を見出すことを目的とする。	特殊型膵癌症例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	20例	平成27年12月14日	平成30年03月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎
40	第3190号	膵頭十二指腸周囲における血管解剖変異に関する検討	膵頭十二指腸切除術は工程の多い術式であり、特に肛門部および上腸間膜動脈（SMA）周囲の廓清を要するので、同部の複雑な脈管解剖についての知識を要する。一方で肝動脈、胆管、上腸間膜動静脈の分枝は分岐・合流形態に変異があり、個々の症例で術前に変異を知ることが重要である。一般にリンパ廓清は領域動脈をenblockに切除するが、主要動脈がreplaseしている場合には動脈を温存しつつ廓清を行う必要があり、廓清手技が煩雑となる。本研究では肝動脈、SMA、上腸間膜静脈（SMV）の変異形態の頻度を検討するとともに、正常解剖症例と変異症例を比較して手技が煩雑となるか、またリンパ再発が多いかどうか検討する。	膵頭十二指腸切除術を施行した症例 平成17年1月1日～ 平成27年10月5日	260例	平成27年12月14日	平成30年03月30日	外科学 （消化器・一般外科） 小林　慎二郎

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
41	第3215号	リコンビナントトロンボモジュリンがDIC治療に与える影響	リコンビナントトロンボモジュリン（rhTM）の治療効果に関するエビデンスは十分と言えず、海外における第Ⅲ相試験（ART-123 trial）が現在進行中である。当院では2010年以降、その治療効果が明らかでないことから、救命病棟では使用せず、一般病棟では適応があれば使用する治療体制をとってきた。これらの結果を調査し、敗血症性DIC治療に与えたrhTMの治療効果を明らかにする。	播種性血管内凝固症候群 平成22年1月1日～平成27年9月30日	100例	平成28年01月20日	平成32年12月31日	外科学 （消化器・一般外科） 片山　真史
42	第3217号	原発性アルドステロン症患者における心血管イベント発症について	原発性アルドステロン症（PA）では、本態性高血圧症（EH）よりも心血管イベントが多いことが知られている。しかしながら、PA患者で手術治療もしくはミネラルコルチコイド受容体拮抗薬（MRB）による介入後の心血管イベント（CVEs）についての報告は少ない。また長期フォローの研究データもほとんどない。従って、本研究ではPA患者とEH患者における心血管イベント発症について、長期介入での発症頻度を検討する。	2006年1月から2015年1月までの間に当院でPAもしくはEHと診断された20～90歳の症例 平成18年1月1日～平成27年1月1日	200例	平成28年01月26日	平成29年08月31日	内科学 （代謝・内分泌内科） 【西部病院】 福田　尚志
43	第3224号	大動脈弁狭窄症における新たな心エコー図指標の検討	大動脈弁狭窄症は最も頻度の高い弁膜症であり、超高齢社会を迎えた日本において爆発的に増加している。大動脈弁狭窄症における重症度診断のゴールドスタンダードは心エコー図であり、弁口面積、最高血流速度、平均圧較差に乖離を認める症例が多く存在することが報告され、重症度診断に悩む症例も少なくない。また、低圧較差の群に関する予後に関しては一定の見解が得られてなく、その治療方針決定に関しても日常臨床において大変重要な問題である。今回、我々は大動脈弁位ドップラー波形から、弁口面積や圧較差ではない時相解析による新たな目標、acceleration time/ejection time ratioが重症度診断及び予後推定に有用であるかどうかを検討する。	経胸壁心エコー図を施行した大動脈弁狭窄症例 平成24年12月1日～平成27年3月31日	300例	平成28年01月26日	平成30年03月31日	内科学 （循環器内科） 出雲　昌樹
44	第3228号	当院における泌尿器科系がん患者の治療成績に関する検討	人口の高齢化に伴い、悪性疾患で死亡する患者数は増加しているが、当院は急性期病院であることから、自ら治療した患者を最期まで経過観察することは容易でない。一方、患者が治療施設を選択する際は各施設のwebsite上で公表されている治療成績を参考にすることが増えている。このため、当科で治療を行った泌尿器科系がん患者（腎癌・腎盂尿管癌・膀胱癌・前立腺癌・精巣癌）について、その治療成績を把握するとともに、公表することを目的として調査を行う。	当科で治療を行った泌尿器科系がん患者（腎癌・腎盂尿管癌・膀胱癌・前立腺癌・精巣癌） 平成12年1月1日～平成27年12月31日	500例	平成28年02月22日	平成30年12月31日	腎泌尿器外科学 力石　辰也

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
45	第3256号	特発性間質性肺炎合併肺癌患者の内科治療に関する後ろ向き調査	特発性間質性肺炎（IIPs）には高率に肺癌が発生し、特に特発性肺線維症（IPF）での肺癌の発生率は10～30%、相対リスクは7～14倍とされる。IIPsに合併した肺癌に対して治療を行う場合、手術、放射線療法、化学療法のいずれも急性憎悪の契機となることが問題になる。IIPs合併進行/術後再発肺癌に対しては化学療法や緩和療法が行われるが、化学療法の大規模な前向き試験はなく、緩和療法単独の頻度も明らかでない。このため、IIPs合併進行肺癌の治療について、ガイドライン策定に寄与する最新の実態調査を行うことを目的とする。さらに、化学療法の効果と急性憎悪の危険因子を検討する。また、緩和療法単独が選択された症例に関する検討を行う。	20歳以上の下記症例 （1）IIPsに合併した進行肺癌（臨床病期：Ⅳ期または術後再発） （2）原発性肺癌の病理診断例 平成24年1月1日～平成25年12月31日	期間中に該当する全例 （全体3,000例）	平成28年04月14日	平成30年12月31日	内科学 （呼吸器内科） 峯下　昌道
46	第3261号	乳房MRIにおけるBPEと乳癌サブタイプの検討	乳癌画像診断においてMRIは感度が高い検査である。一方、背景乳腺の増強効果（BPE:Background Parenchymal enhancement）により診断に苦慮する症例もある。BPEは月経周期に影響されることが知られており、また乳癌もホルモン依存性がある。乳癌は病理検体よりエストロゲン受容体（ER）、プロゲステロン受容体（PgR）、HER2の発現状況を測定し、生物学的性状の異なるサブタイプに分類することにより予後予測や治療方針決定がなされている。過去にBPEが乳房MRIの病変検出感度・特異度に影響するという報告はあるが、BPEとサブタイプについて検討した報告はない。そこで今回、我々は月経周期をガイドライン推奨期間に合わせて乳房MRIを施行した乳癌症例について、BPEとサブタイプに傾向がないか検討する。	乳癌（月経周期をガイドライン推奨期間に合わせて術前乳房MRIを当院で施行し、手術検体で病理学的診断がなされている症例） 平成22年1月10日～平成27年7月30日	80例	平成28年03月01日	平成31年03月31日	ブレスト＆イメージング先端医療センター 後藤　由香
47	第3270号	当科における気管切開の臨床統計的検討	最近2年間で気管切開後両側気胸が生じた症例が2例あった。気管を逆U字に切開する施設が多い中、当科では伝統的に横切開を行い皮膚と気管を上下で数か所縫合する方法を行っている。今回、臨床統計にて合併症の頻度を中心に検討し、横切開の利点、欠点を考察する。また気胸が生じた機序についても考察する。	気管切開を施行した症例 平成22年4月1日～平成27年11月30日	250例	平成28年03月15日	平成30年03月31日	耳鼻咽喉科学 春日井　滋
48	第3271号	副神経を保存した頸部郭清術における肩関節機能について	頚部郭清術後患者のQuality Of Life（QOL）を低下させる要因として副神経障害は重要な位置を占めており、術後のリハビリテーション（rehabilitation：RE）の重要性が報告されるようになった。副神経を切断した症例だけでなく、温存した症例においても早期に適切なREが行われないと癒着性関節包炎をきたし、肩関節可動域制限や疼痛につながると報告されている。今回、副神経を保存し、早期からREを導入した症例の肩関節機能における経時的な変化について検討する。肩関節機能で副神経の麻痺の頻度、回復率、回復までの期間などを導き出す。	頭頚部癌で頚部郭清を施行した症例 平成20年4月1日～平成27年3月31日	50例	平成28年03月15日	平成30年03月31日	耳鼻咽喉科学 春日井　滋

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
49	第3272号	甲状腺手術における反回神経麻痺症例の検討	甲状腺手術時、反回神経を温存しえたと考えられる症例でも麻痺を来たすことがある。また術直後に麻痺を認めず、翌日以降に麻痺を認めることも稀にある。神経を温存したにもかかわらず、術後反回神経麻痺を認めた症例を中心に、可動性回復までの期間や麻痺の要因などについて検討する。	当科で甲状腺手術を施行した症例 平成20年4月1日～ 平成25年3月31日	約100例	平成28年03月15日	平成30年03月31日	耳鼻咽喉科学 春日井　滋
50	第3283号	非弁膜症性心房細動患者における虚血性脳卒中及び全身性塞栓症の発症抑制に用いられる新規経口抗凝固薬（NOACs）の使用実態調査。	医薬品使用実態調査Medication Use EvaluationH(MUE)とは、医薬品の使用のみならず、医薬品使用プロセス等の実態を把握することにより、医薬品適正使用の推進・患者の安全の向上を図るものである。MUEは他職種連携で行うことで、調査結果を臨床現場に反映できるとされる。当院では平成23年よりMUEを実施し、平成26年からは薬事委員会の同種同効薬による採用基準が改訂され、既存の同種同効薬の採用がある場合は原則、後発医薬品等の廉価な薬剤を優先し、有効性や安全性に明らかな差がない場合は採用していない。また同種同効薬は原則、2剤までとし、経済性を考慮した「フォーミュラリー」を作成し、院内の使用推奨基準を設けることとなった。今回、ダビガトラン（プラザキサ）、リバーロキサバン（イグザレルト）、アピキサバン（エリキュース）、エドキサバン（リクシアナ）のフォーミュラリー作成のため、院内での使用実態調査を行う。	（1）当院で治療を開始したプラザキサ、イグザレルト、エリキュース、リクシアナを処方された非弁膜症性心房細動症例 →平成27年9月1日～ 平成28年2月29日 （2）虚血性脳卒中（心原性または原因不明）を発症した患者で上記のNOACsまたはワーファリンの治療を受けていた症例 →平成23年3月1日～ 平成28年2月29日	（1）100例 （2）100例	平成28年03月14日	平成30年03月31日	薬剤部 土岐　真路
51	第3304号	難治性副腎疾患の診療の質向上と病態解明に関する研究	本研究では、難治性副腎疾患の代表疾患である副腎腫瘍のうち、褐色細胞腫（PHEO）、副腎腺腫によるクッシング症候群（CS）およびサブクリニカルクッシング症候群（SCS）、ACTH非依存性大結節性副腎皮質過形成（AIMAH）、副腎皮質癌（ACC）を対象として1）新たな診断・治療法の開発の基盤となる疾患レジストリーの構築と疾患コホートの形成、多施設共同研究体制の構築、2）診療ガイドラインの質向上に資する検査・治療法、疾患予後に関するエビデンス創出を目的とする。	褐色細胞腫、クッシング症候群、サブクリニカルクッシング症候群、AIMAH、副腎皮質癌、非機能性副腎腫瘍 平成18年1月1日～ 平成27年12月31日	150例 （全体1,050例）	平成28年04月22日	平成30年03月31日	内科学 （代謝・内分泌内科） 【西部病院】 方波見　卓行
52	第3305号	ループス腎炎患者の長期的予後の解析	ループス腎炎の予後は改善したとされるが、日本人における長期的予後解析は十分なされていない。近年、生命予後だけでなく治療関連の副作用などで生じる臓器ダメージに着目した解析が重要視されている。よって、本研究では通常診療で得られた診療情報を基に、臓器ダメージと長期予後の関係、その予後予測因子を同定する。	当院を受診し、1987年のアメリカリウマチ学会の分類基準を満たし、腎生検で診断したループス腎炎、もしくはそれに準ずる症例。ただし、追跡不能例は脱落例とする 平成13年1月1日～ 平成28年3月6日	100例	平成28年04月18日	平成30年03月06日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 花岡　洋成
53	第3310号	SAPHO症候群の臨床的特徴の解析	SAPHO症候群（掌蹠膿疱症性関節炎）は掌蹠膿疱症にリウマチ反応陰性の関節炎が伴う疾患で、皮膚症状が先行しない症例もある。SAPHO症候群は希少疾患であるため、症例報告に留まったものが多く、まとまった報告は少ない。当科のSAPHO症候群の臨床的特徴の解析を行う。	掌蹠膿疱症、掌蹠膿疱症性関節炎（SAPHO症候群）と診断された症例 平成16年4月1日～ 平成27年12月31日	50例	平成28年04月22日	平成30年12月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 永渕　裕子

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
54	第3316号	慢性心房細動患者に対してのカテーテルアブレーションが左室機能に与える影響。Speckle-Tracking Echoを用いた検討	慢性心房細動に対してのカテーテルアブレーションは、治療法の一つとして選択されているが、アブレーションが左室機能に与える影響はまだ不明な点が多い。心機能評価として心臓超音波検査を用いて、更に正確な評価が可能なSpeckle-Tracking Echoにより、アブレーション前後の左室機能に与える影響を評価する。	慢性心房細動と診断された症例 平成18年8月1日～ 平成23年12月31日	33例	平成28年04月22日	平成30年12月31日	内科学 （循環器内科） 松田　央郎
55	第3317号	大学病院での外科医を中心とした緩和ケアとチーム医療の有用性	近年、我が国において緩和ケアの認識が高まり、その必要性が増している。その中で多くの癌患者の治療を行う大学病院においても、緩和ケアの重要性が増していると考えられる。そこで、当科では癌患者の多くの治療過程に携わる消化器外科医が多職種による緩和ケアチームを結成した。今回、緩和ケアチームの結成過程、チーム結成後の効果について検討する。	入院中の癌性疼痛を訴える消化器癌患者 平成17年8月1日～ 平成18年7月31日	100例	平成28年04月22日	平成29年12月31日	外科学 （消化器・一般外科） 四万村　司
56	第3318号	変形性足関節症に対する画像診断、関節鏡診断による重症度評価・疫学研究	変形性足関節症の重症度評価法として、X線学的に評価できる高倉分類が重症度判定、治療方針決定に際し重要な役割を担ってきた。一方で変形性関節症全般においては近年、X線学的所見と合わせてCTやMRI、関節鏡などの診断ツールが普及し、X線診断では得られない関節軟骨周辺の状態などから重症度や予後を判定する方法が注目されている。しかし、足関節領域においては未だこれらの評価法による重症度評価や予後予測に対する一定した見解は得られていない。本研究の目的は変形性足関節症の重症度や長期予後を推定する画像診断所見、関節鏡所見を明らかにすることである。	下記期間中に変形性足関節症と診断された患者 平成15年1月1日～ 平成27年12月31日	1,000例	平成28年04月22日	平成30年12月31日	整形外科学 三井　寛之
57	第3327号	3D心エコー図による大動脈弁閉鎖不全症の定量的評価の妥当性：MRIとの比較	高齢化が進む先進諸国において大動脈弁疾患の罹患率は増加傾向にある。大動脈弁閉鎖症（AR）における重症度評価は心エコー図がゴールドスタンダードであり、2D心エコー図により算出される逆流量や有効逆流弁口が推奨されている。しかしながら、逆流弁口が円であることや、吸い込み血流が半円球であることなど様々な仮定のもとに算出されており、日常診療においてARの臨床像と心エコー図による重症度とに乖離を認める症例が少なくない。近年開発された3D心エコー図は仮定を用いることなく逆流弁口を計測することができ、より正確なARの定量評価及び重症度診断が可能である。今回、我々は3D心エコー図によりAR定量評価を行い、MRIとの比較検討することにより、その妥当性を検証する。	2D、3D心エコー図及び心臓MRIを施行した大動脈弁閉鎖不全症例 平成24年2月13日～ 平成28年3月23日	50例	平成28年05月09日	平成29年05月08日	内科学 （循環器内科） 出雲　昌樹
58	第3338号	セツキシマブ併用放射線療法に関する有害事象の検討	2012年から頭頸部癌の標準治療の一つに加わったセツキシマブ併用放射線療法は、従来の化学放射線療法では見られなかった有害事象がある。当院で経験した有害事象をまとめ、その対策を検討する。	頭頸部癌 平成25年8月1日～ 平成28年4月5日	30例	平成28年05月24日	平成30年03月31日	耳鼻咽喉科学 赤澤　吉弘

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
59	第3339号	透析後ヘモグロビン濃度が血管アクセスに与える影響の検討	現在、血液透析患者の腎性貧血の管理について、本邦・西欧諸国から多くのガイドラインが発表されているが、いずれもその根拠となる臨床研究は透析前のヘモグロビン（Hb）濃度について検討されたものである。一方でHb濃度は透析後に濃縮されることが予想されているにも関わらず、透析後Hb濃度が患者に与える影響を検討した臨床研究は、現在に至るまでほぼない。本研究では、透析後におけるHb濃度が血管アクセスの予後とどのように関連するかを明らかにする。また、現在、標準的な指標として用いられている透析前Hb濃度で検討されたアウトカムとの関連とも、効果指標について比較検討する。	慢性腎不全、維持血液透析施行中の症例 平成22年4月1日～ 平成27年3月31日	51例 （全体150例）	平成28年05月24日	平成29年03月31日	内科学 （腎臓・高血圧内科） 谷澤　雅彦
60	第3341号	経動脈狭窄症に対するステント留置術後に合併する微小脳梗塞の病態調査	一般的に、頚動脈狭窄症に対するステント留置後には20～50%の割合で無症候性の微小脳梗塞が生じると言われる。その因子としてプラークの脆弱性、アプローチルートの動脈硬化性変化、術前の脳血流量、術中や術後の低血圧などが挙げられる。また我々は治療側大脳だけでなく、対側大脳や小脳にも認められることに以前より注目しており、これらの因子を解明し、報告したい。	頚動脈狭窄症 平成25年4月1日～ 平成28年2月29日	60例	平成28年05月20日	平成30年03月31日	脳神経外科学 伊藤　英道
61	第3353号	我が国における前置癒着胎盤の周産期管理に関する調査	前置胎盤は分娩時に大量出血を生じる妊娠異常の一つである。帝王切開術や子宮内容除去術などの既往子宮手術後における前置胎盤例では、胎盤が筋層に強固に付着する「癒着胎盤」の合併に留意する必要がある。「前置癒着胎盤」症例の周術期管理は（1）子宮全摘出術、もしくは（2）胎盤を残した状態での子宮温存（保存療法）の2つに分類される。Interventional radiologyの普及に伴い、一時的血流遮断や子宮動脈塞栓術を用いた出血制御を導入する方法も提唱されているが、全国規模における動向は不明である。次回妊娠の希望が強い場合は前述（2）の保存療法が理想的であるが、産褥期における感染や異常性器出血などの合併症も指摘されており、本邦における多数の予後解析は行われていない。本研究では、前置癒着胎盤の周術期管理の実態ならびに「胎盤残置例」の予後を明らかにする。	前置癒着胎盤例 平成22年1月1日～ 平成26年12月31日	7例 （全体72例）	平成28年06月20日	平成29年12月31日	産婦人科学 五十嵐　豪

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
62	第3355号	小児ネフローゼ症候群におけるミゾリビン血中濃度に影響を与える因子の検討	小児ステロイド依存性（難治性）ネフローゼ症候群ではステロイド薬の副作用を回避する（ステロイド薬を可能な限り減量する）目的で通常免疫抑制薬を併用する。その一つであるミゾリビンは副作用が少なく、長期的に使用することも可能な薬剤である。その効果を得るため、指標として血中濃度を参考にするが、同一患者においても血中濃度にばらつきが生じ、十分な効果が得られないことがある。血中濃度がばらつくと効果にも影響し、血中濃度低下による再発防止のため、その都度ステロイド薬を増量することもある。また、これに伴いミゾリビンの増量を余儀なくされたり、他の免疫抑制薬に変更することも考えられる。本研究ではミゾリビン血中濃度に影響を与える因子を明らかにする。	小児期発症ネフローゼ症候群のうち、ミゾリビンの投与を受けた方 平成17年4月1日～ 平成28年3月31日	30例	平成28年06月22日	平成29年05月31日	小児科学 齋藤　陽
63	第3368号	ハイドロキシアパタイト人工骨における骨新生の観察研究	頭蓋骨形成術に用いる人工骨であるハイドロキシアパタイト（アパセラム®）は日本以外の国でも数多く使用されている。その理由の一つには骨新生形成を促進する材料であることが挙げられる。しかし、何らかの理由で人工骨除去となる場合があり、その原因を診療録から調査する。	頭部欠損症例で人工骨による頭蓋骨形成後、医学的理由により人工骨が除去された症例 平成21年6月1日～ 平成26年12月31日	2例	平成28年07月08日	平成30年05月19日	脳神経外科 【東横病院】 小野　元
64	第3391号	パルボウイルスB19感染に伴うウイルス性関節炎の調査	パルボウイルスB19感染は、小児において伝染性紅斑として発症することが知られている。一方、成人初感染例では、多くの患者で多発関節炎の臨床像を呈する。当科外来で診察したパルボウイルスB19感染症においては、臨床像として膠原病（特に全身性エリテマトーデス）や急性発症の関節リウマチと類似し、診断に苦慮する場合があることから、今回、成人パルボウイルスB19感染によるウイルス性関節炎の臨床像を調査する。	ウイルス性関節炎（パルボウイルスB19感染に伴う）症例 平成25年4月1日～ 平成28年1月30日	25例	平成28年08月02日	平成31年03月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 【西部病院】 柴田　朋彦
65	第3392号	腹腔鏡下肝切除術の安全性に関する検討 ～後ろ向き多施設共同研究～	腹腔鏡下肝切除術の安全性評価は急務であり、肝臓内視鏡外科研究会は腹腔鏡下肝切除術の症例登録システムを構築した。この前向き登録システムが安全性の向上に寄与するかについては以前の成績と比較する必要がある。今回、腹腔鏡下肝切除症例前向き登録開始（2015年）以前に行われた腹腔鏡下肝切除術の安全性を多施設共同研究で後ろ向きに検討し、評価する。	腹腔鏡下肝切除症例 平成22年1月1日～ 平成26年12月31日	20例 （2015年以前に施行された症例全て）	平成28年08月02日	平成29年12月31日	外科学 （消化器・一般外科） 片山　真史
66	第3393号	当院における開心術後の痙攣症例の検討	心臓大血管手術後の痙攣の原因には脳血管病変、電解質異常、薬剤などがあり、その頻度は0.3～1.1%と言われている。しかし、当院での心臓手術後の痙攣発症率は2.5%と高い。本研究は後方視的に痙攣発症に関与する因子について検討を行うことを目的とする。	心臓大血管手術を受けた症例 平成26年1月1日～ 平成26年12月31日	160例	平成28年08月02日	平成29年05月31日	麻酔学 荒尾　沙理

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
67	第3412号	小児有熱性尿路感染症に関する後方視的検討	有熱性尿路感染症（UTI）は生後3カ月未満の乳児有熱性疾患の約1割を占める比較的頻度の高い疾患である。UTIは繰り返すことで患側腎に瘢痕が生じ、末期腎不全に進展する危険性も報告されている。 その背景には乳児期発症UTIの約40%に先天性膀胱尿路管逆流（VUR）を合併することが知られている。高度のVURには腎瘢痕形成、末期腎不全への進展に寄与する可能性も報告されている。内科的管理の目標は末期腎不全へと進展する可能性があるUTIの再燃を予防することである。VURを有する患児に対しては抗菌薬の予防的少量持続投与が行われているが、賛否両論あり、一定の見解がないのが現状である。今回、UTI患児に対して、負担が少なく、より腎瘢痕形成さらに末期腎不全に至らない方法を多施設の症例で検討する。	小児期発症初発有熱性尿路感染症患者（入院症例） 平成16年4月1日～ 平成25年3月31日	80例 （全体170例）	平成28年08月17日	平成29年05月31日	小児科学 齋藤　陽
68	第3435号	心房細動を伴う失神患者の臨床経過	失神患者を対象とした研究は多数行われているが、心房細動を併発した疾患患者のみを対象とした研究は非常に少ない。今後、高齢化に伴い心房細動患者がさらに増加する中で、心房細動を合併した失神患者の臨床経過を明らかにし、診療の向上に寄与することを目的とする。	心房細動、一過性意識消失発作 平成24年4月1日～ 平成27年12月31日	500例	平成28年09月12日	平成31年12月31日	内科学 （循環器内科） 古川　俊行
69	第3447号	認知症疾患と犯罪行為との関連	海外の調査研究では、前頭側頭型認知症と犯罪行為に関連性があると言われている。本邦でも同様の傾向が認められるか、調査したい。	認知症、アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症 平成23年4月1日～ 平成28年3月31日	約300例	平成28年10月03日	平成33年03月31日	神経精神科学 袖長　光知穂
70	第3449号	加算平均心電図VAT（ventricular activation time）初期成分を用いた左室肥大の3次元的な診断方法の検討	左室肥大の診断基準はいくつか報告されているが、いずれも感度は57～66%と高くない。最も広く認識されている標準12誘導心電図のRV5(6)+SV1値はV5からV1方向への一方向ベクトルの評価に留まっており、心臓全体の肥大を捉えることはできないと考える。そのため今回、左室肥大の新たな心電図診断の指標として加算平均心電図による3次元指標を検討する。	生理検査室で心室遅延電位検査を施行し、超音波センターで心臓超音波検査を施行している症例 平成25年1月4日～ 平成27年11月30日	150例	平成28年09月28日	平成29年09月30日	内科学 （循環器内科） 原　正壽
71	第3451号	CASE-CONTROL STUDY OF MICROINVASIVE(SUPERFICIALLY INVASIVE) SQUAMOUS CELL CARCINOMA OF THE CERVIX WITH AN UNFAVORABLE CLINICAL OUTCOME（好ましからざる転帰をとった子宮頸部微小浸潤扁平上皮癌の症例対照研究）	子宮頸部微小浸潤癌における臨床的意義を正確に反映する病理学的パラメーターを抽出し、子宮頸部微小浸潤癌の病理学的診断基準を再検討する。	子宮頸部扁平上皮癌IA期 平成9年1月1日～ 平成22年12月31日	9例	平成28年10月06日	平成29年12月31日	産婦人科学 鈴木　直

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
72	第3452号	腫瘍性尿管閉塞に対する全長型金属尿管ステントを用いた治療成績の検討	泌尿器科領域以外の腫瘍性病変が原因で尿管を管外圧に圧迫する腫瘍性尿管閉塞による腎後性腎不全患者に対して行う尿管ステント留置術は3～6ヶ月間に一回の交換が必要なこと、圧迫が進行すると内腔が閉塞しステント不全となるなどの問題点がある。2014年より保険適用が認められた全長型金属尿管ステントは従来のシリコン製ステントに比べ外方からの圧迫に対して強度が高いこと、さらにステントの交換期間が1年であり、患者のQOL向上につながる有用なデバイスとなることが予想されるため、この有用性をステント挿入後1年間の観察研究で検討する。	腫瘍性尿管閉塞 平成26年12月1日～ 平成28年9月10日	100例	平成28年10月06日	平成33年03月31日	腎泌尿器外科学 中澤　龍斗
73	第3453号	原発性副甲状腺機能亢進症における超選択的甲状腺静脈サンプリングの有用性	原発性副甲状腺機能亢進症の原因として副甲状腺腺腫が多いが、通常超音波やCT検査、99mTc-MIBIシンチグラフィなどによる画像検査をまず行う。しかし、責任病変を検出できないことや、画像検査結果に乖離がみられることもある。さらに複数腺に責任病変があり、すべての責任病変の検出は困難である。甲状腺静脈サンプリングは、原発性副甲状腺機能亢進症の責任病変の局在診断に有用であったとの報告がある。このことから、甲状腺静脈サンプリングの結果を通常の画像検査の診断結果や手術による責任病変の位置と比較し、診断能を明らかにすることは、今後の診断および治療方針の決定に重要である。	原発性副甲状腺機能亢進症（甲状腺静脈サンプリングを施行し、手術により副甲状腺の局在が同定できた症例） 平成25年1月1日～ 平成28年8月31日	10例	平成28年10月13日	平成30年03月31日	放射線医学 山田　隆之
74	第3469号	小脳梗塞患者の急性期病院退院時の歩行自立度に 関連する因子についての検討	脳卒中医療体制の構築に伴う医療機関の機能分化により、急性期病院では在院日数の短縮が大きな課題であり、短期的な機能回復の程度を予測、判定しすみやかな方針決定に繋げることは重要である。退院時歩行自立度は、自宅退院の可否の判定に重要な因子である。脳梗塞患者での歩行自立度に関連する因子としては年齢、運動麻痺や感覚障害の程度などが報告されているが、小脳梗塞患者については散見されるのみである。今回、小脳梗塞患者の急性期病院退院時の歩行自立度に関連する因子を明らかにする。	小脳梗塞 平成23年4月1日～ 平成28年3月31日	50例	平成28年11月07日	平成30年03月31日	リハビリテーション部 相川　駿
75	第3470号	原発性無月経を呈したVATER syndromeの一例	本症例は原発性無月経、挙児希望があり当院生殖内分泌外来を受診された症例である。基礎疾患に非常に稀なVATER syndromeを合併しており、精査の結果、子宮欠損による子宮性無月経をであると診断した。この研究はVATER syndromeに関する知見を深めることを目的とする。	VATER syndrome 平成28年4月25日～ 平成28年6月6日	1例	平成28年11月07日	平成30年03月31日	産婦人科学 河村　和弘

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
76	第3491号	局所麻酔薬変更に伴う透析穿刺時疼痛に関する検討	維持血液透析患者は週3回、一回2本の穿刺針をバスキュラ･アクセスに穿刺し、透析を行っている。穿刺針は採血針に比して太く、穿刺時の痛みも大きい。以前より穿刺針時疼痛に対して表面麻酔テープを用いてきたが、テープ貼付による皮膚炎のため、使用できなくなる症例が多い。2015年度より保険適用となった局所麻酔クリームへの変更例も増えてきており、麻酔薬の変更に伴う疼痛や皮膚状態の変化に関してカルテベースで後ろ向きに調査することを目的とする。	維持血液透析患者 平成28年7月1日～ 平成28年8月31日	20例	平成28年12月13日	平成29年06月30日	内科学 （腎臓･高血圧内科） 松井　勝臣
77	第3492号	当院における外国人妊婦の現状と課題を明確にする ～安全に出産するための外来での役割～	当院ではH27年度より医療通訳を介入させ、日本語を話すことができない外国人妊婦の分娩も受け入れている。過去10年間の外国人妊婦の分娩件数は年平均4.8人であったが、H28年度の分娩予約数は27人で約5.6倍に増加した。外国人妊婦は言葉が通じず、頼れる人が少ない中でも当院での分娩を希望している。当院における外国人妊婦の現状を振り返り、必要な看護サービスを明らかにする。	当院で出産した外国人妊婦 平成18年4月1日～ 平成28年3月31日	50例	平成28年12月13日	平成30年03月31日	看護部外来 【多摩病院】 森山　みどり
78	第3494号	当院における大腸内視鏡的粘膜下層剥離術の現状について	大腸腺腫、早期大腸癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は2012年より本邦で保険収載された。当院でも2012年より大腸ESDを導入し施行している。しかしながら大腸ESDは内視鏡操作の困難性、壁の薄さなどの様々な要因からその技術的難易度が高く、一定率で穿孔などの偶発症が報告されている。本研究では、当院にて大腸ESDを施行した症例について後ろ向きに成績を検討し、大腸ESDの安全性を評価する。	当院で大腸腺腫、大腸がんに対して内視鏡的粘膜下層剥離術を施行した症例 平成24年1月1日～ 平成28年11月16日	200例	平成29年01月04日	平成29年12月31日	内科学 （消化器･肝臓内科） 佐藤　義典
79	第3495号	憩室出血における早期･晩期再出血のリスク因子についての検討	近年、高齢化により大腸憩室症は増加しており、それに伴って偶発症である憩室出血症例も増加している。憩室出血の問題点は、緊急下部消化管内視鏡を施行した場合においても出血源同定率が低いこと、また再出血を繰り返す症例が多いことである。当院では出血源の同定には腹部CTの施行や緊急内視鏡施行の際の先端フード着用、Non-traumatic tubeの使用が有用であることを報告してきた。今回、当院にて大腸憩室出血と診断され入院した症例を対象とし、入院中に生じた肉眼的血便を早期再出血、退院後に生じた肉眼的血便を晩期再出血と定義し、そのリスク因子を解析する。	当院にて憩室出血の診断で入院加療を要した症例 平成16年1月1日～ 平成28年11月16日	450例	平成29年01月04日	平成29年12月31日	内科学 （消化器･肝臓内科） 佐藤　義典

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
80	第3496号	上部消化管出血症例における内視鏡止血後の抗血栓薬のマネージメントについて	上部消化管出血は、日常診療においてしばしば遭遇する、緊急内視鏡を要する頻度が高い病態である。近年では高齢化により、抗血栓薬内服例における上部消化管出血症例が増加している。内視鏡ガイドラインでは、緊急上部消化管内視鏡止血後の抗血栓薬再開時期は定められておらず、各担当医の判断に委ねられているのが現状である。しかしながら、早期再開すると再出血率の増加をきたす可能性、長期休止は血栓症発症リスクがあり、判断が困難である。今回、当院における抗血栓薬内服症例における上部消化管出血症例を対象とし、内視鏡止血後の抗血栓薬再開時期による再出血率や血栓症発症率を検討する。	当院で抗血栓薬ないh苦衷の上部消化管出血に対して、緊急内視鏡的止血術を施行した症例 平成19年1月1日～ 平成28年11月16日	300例	平成29年01月04日	平成29年12月31日	内科学 （消化器・肝臓内科） 佐藤　義典
81	第3498号	急性期大動脈解離に合併した急性期脳梗塞症例の観察研究	急性期脳梗塞治療では発症からの時間が重視されるが、t-PA使用に先立ち、急性大動脈解離の除外診断はきわめて重要であり、注意喚起されている。今回、救急搬送された急性脳梗塞症例における急性大動脈解離合併症例について、その原因精査や検討を診療録から行う。	急性大動脈解離に合併した急性期脳梗塞症例 平成21年4月1日～ 平成28年6月30日	4例	平成28年12月27日	平成30年10月13日	脳神経外科 【東横病院】 小野　元
82	第3499号	B型慢性肝炎に対するアデホビルによる腎機能障害の実態	B型慢性肝炎に対する抗ウイルス療法において、ラミブジン耐性例にアデホビルを追加することが推奨されている。アデホビルは腎毒性を有することと、重症例ではFanconi症候群を発症することが知られているものの、アデホビルによる腎機能障害の実態は十分に明らかになっていない。今回、このアデホビルによる腎機能障害の実態を明らかにする。	アデホビルを内服しているB型肝炎 平成14年1月1日～ 平成28年10月17日	50例	平成29年01月06日	平成29年10月18日	内科学 （消化器・肝臓内科） 【多摩病院】 奥瀬　千晃
83	第3500号	膠原病領域における無症候性心筋障害の意義に関する研究	近年、糖尿病患者や高齢者で症状を伴わない心筋虚血発作、無症候性心筋虚血による心筋障害が重要視されているが、膠原病領域における意義は不明である。本研究では全身性エリテマトーデス（SLE）、全身性強皮症（SSc）、混合性結合組病（MCTD）の患者における無症候性心筋障害の頻度と臨床特徴を調査し、長期予後に与える影響を明らかにする。	当院を受診しSLE、SSc、MCTDと診断された方 平成21年5月1日～ 平成27年12月1日	60例	平成29年01月04日	平成33年04月01日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 花岡　洋成
84	第3501号	先端刺入法大腸粘膜切除術と大腸粘膜下層剥離術の 治療成績の比較検討	大腸粘膜切除術（EMR）は大腸腫瘍を切除できる標準的な方法であるが、腫瘍径が大きい場合は分割切除や腫瘍遺残のリスクがある。一方で大腸内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は腫瘍径に関わらず切除することが可能である、近年大腸ESDは件数が増加しているが、コスト・時間面においてESDはEMRより非効率的である。2001年に野村らがスネア先端刺入法EMRと通常EMRの比較検討を行い、スネア先端刺入法EMRの一括切除率の優位性を論文で示したが、スネア先端刺入法EMRと大腸ESDの治療成績を比較検討した報告はない。今回、どのような病変であればスネア先端刺入法EMRが大腸ESDと同等の治療成績を示せるか明らかにし、不必要な大腸ESD施行を減らすことを検討する。	当院でEMRもしくはESDを施行したIp型腫瘍を除く腫瘍 平成20年4月1日～ 平成26年12月31日	200例	平成29年01月04日	平成31年03月31日	内科学 （消化器・肝臓内科） 【西部病院】 小澤　俊一郎

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
85	第3502号	治療抵抗性炎症性筋疾患患者の予後解析	炎症性筋疾患には多発性筋炎、皮膚筋炎が含まれる。標準的治療としてステロイド療法と免疫抑制薬の併用が選択されるが、20%前後の治療抵抗例が存在する。これらの患者に対する治療は未だ確立されていない。今回、当院に通院された治療抵抗性炎症性筋疾患症例の治療内容と、予後との関係を診療情報を基に解析する。	当院を受診し、1剤以上の免疫抑制薬に不応である炎症性疾患症例 平成13年1月1日～平成28年3月6日	30例	平成29年01月04日	平成30年03月06日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 花岡　洋成
86	第3503号	溶血所見を欠く直接Coombs試験陽性の全身性エリテマトーデスは予後が悪いのか	全身性エリテマトーデス（SLE）の予後は依然不良で、確定的な予後予測因子が同定されていないために盲目的な診療を余儀なくされている。近年、アメリカリウマチ学会からSLEの新規分類基準が策定され、「溶血所見を欠く直接Coombs試験陽性」が新しく盛り込まれた。この試験には免疫複合体の過剰な蓄積を反映している可能性が想定されることから、予後予測因子として応用可能であると着想した。このため、本研究では診療録から得られる診療情報を基に、同試験陽性の有無と長期予後との関係を調査する。	当院を受診し、2011年アメリカリウマチ学会の分類基準を満たす方 平成13年1月1日～平成28年11月30日	200例	平成29年01月04日	平成30年03月06日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 花岡　洋成
87	第3505号	低リスク妊婦の正期産における至適分娩時期に関する検討	正期産期における分娩に関し、妊娠39週以降での分娩はそれ以前の週数の分娩と比較し、NICU入院や新生児呼吸障害が少ないことが諸外国から報告されているが、本邦での報告は少ない。今回、合併症のない妊婦の正期産における至適分娩時期について検討する。	合併症のない単胎妊娠の正期産症例 平成23年1月1日～平成27年12月31日	1700例	平成29年01月04日	平成29年12月31日	産婦人科学 水主川　純
88	第3506号	HER2陽性乳癌における臨床的完全奏効症例のコホート研究	HER2陽性乳癌では1次治療で長期臨床的完全奏功となり、抗HER2治療のトラスツズマブ治療で長期に維持療法を施行されている症例がある。トラスツズマブの長期使用は患者にとって不要な治療の可能性があり、また医療費が非常に高額となる。このような症例に対し、どの時点まで抗HER2治療を継続するべきかはまだ分かっていない。そのため今回、Japan Clinical Oncology Group（JCOG）乳がんグループにおいて、多施設の長期臨床的奏功症例のデータを集め、今後の前向き研究の可能性を探索するための後ろ向き検討を行うこととする。	転移・再発乳癌 平成13年1月1日～平成28年4月30日	10例 （全体200例）	平成29年01月04日	平成30年03月31日	外科学 （乳腺・内分泌外科） 小島　康幸
89	第3507号	糖尿病教育入院が腎機能低下速度へ及ぼす影響と その要因に関する検討	糖尿病患者の進展予防には、腎症の早期診断・早期の厳格な治療介入を行う必要がある。当院外来に通院している糖尿病症例では、腎機能eGFRの低下速度が年間3ml/分/1.73m2と、健常人の約10倍であることが明らかになっている。ただし、当院腎臓・高血圧内科の報告によると、慢性腎臓病（CKD）教育入院を行うことにより、腎機能低下速度が減少していた（第59回日本腎臓学会学術集会、2016年）ことから今回、糖尿病教育入院症例において、教育入院を行うことが同様に腎機能の低下阻止に寄与するか検討する。	糖尿病教育入院を施行した方 平成24年1月1日～平成27年9月30日	100例	平成29年01月04日	平成30年03月30日	内科学 （代謝・内分泌内科） 田中　逸

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
90	第3510号	腹部内臓手術後における急性腎障害の予後についての解析	腹部内臓手術後の急性腎障害（AKI）の発生率は約10%と報告されているが、急性腎障害発生後の予後、特に慢性腎障害（CKD）への移行についてはほとんど報告例がない。今回、多摩病院における消化器外科の腹部内臓手術後のAKIの発症例と非発症例を比較し、CKDの発症率と発症率に及ぼす周術期の因子について検討する。	消化器外科手術を受けられた方 平成25年1月1日～ 平成25年12月31日	200例	平成29年01月06日	平成29年08月31日	麻酔学 【多摩病院】 森田　さおり
91	第3512号	2型糖尿病での持効型インスリン導入例における入院加療の効果について	経口血糖降下薬による治療を行ったにも関わらず血糖不良で推移していた2型糖尿病に対して持効型インスリン導入を入院で行った症例と、外来での導入例の長期比較検討を行い、入院加療の効果を検討する。	2型糖尿病 平成20年1月1日～ 平成26年11月30日	100例	平成29年01月06日	平成29年12月31日	内科学 （代謝・内分泌内科） 加藤　浩之
92	第3513号	遊具に関連した小児頭部外傷症例の観察研究	日常生活でよく起こる遊具使用時の小児頭部外傷については近年、社会的にも問題となっている。しかし、これまでに詳細な報告は多くない。今回、入院症例において、遊具に起因した小児頭部外傷症例について検討し、その原因精査や検討を行う。	遊具に関連した小児頭部外傷の入院症例 昭和63年2月1日～ 平成28年5月31日	40例	平成29年01月12日	平成30年10月13日	脳神経外科 【東横病院】 小野　元
93	第3519号	当院での産科危機的出血に対するBakriバルーンの 使用経験と適応症例の検討	保存的止血で止血困難な産科危機的出血では、子宮動脈塞栓術や子宮全摘術などの積極的な止血術が選択される。かつては当院においても、双手圧迫や子宮収縮薬などの保存的止血でコントロールのつかない産科危機的出血では子宮動脈塞栓術が選択されることが多かった。しかし近年、これらの方法は侵襲的な手技であるため、施行前にBakriバルーンを挿入し、保存的止血を試みることが行われつつある。当院においても2015年より産科危機的出血に対し、まずBakriバルーンを挿入し、保存的止血を試みることとしてきた。今回、Bakriバルーンの使用経験を振り返り、有用性・問題点を明らかにすることを目的として検討を行う。	前置胎盤・低置胎盤・弛緩出血 平成27年8月1日～ 平成28年4月30日	6例	平成29年01月06日	平成29年11月30日	産婦人科学 長谷川　潤一
94	第3526号	心筋保護液注入方法が術後の心機能に与える影響の検討	開心術では無血視野を得るため、一時的に心臓を停止させ手術を行う。心停止させるための心筋保護液の注入間隔は手術進行状況により様々であり、予定の30分間隔で注入することが困難である。今回、注入間隔が大きく変動した症例と、予定注入間隔で実施された症例で術後の心機能に与える影響を検討する。	定時手術の成人開心術症例 平成24年1月1日～ 平成28年12月12日	500例	平成29年01月23日	平成31年12月31日	クリニカルエンジニア部 佐藤　尚

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
95	第3527号	血友病の早期新生児の出血に関する検討	近年、選択的帝王切開が血友病新生児の頭蓋内出血のリスクを軽減するとの報告が散見され、米国では選択的帝王切開にて血友病の児を出産する症例が増加している。新生児期に頭蓋内出血を生じると重篤な神経学的後遺症を残すため、新生児期の出血を予防することは非常に重要である。当院に通院中の血友病患者を対象に、分娩に関連した新生児期の出血リスクを後方視的に検討する。	当院に通院中の血友病患者のうち、出生時の状況が明らかな方 平成元年1月1日～ 平成28年12月26日	100例	平成29年01月16日	平成30年03月31日	小児科 【西部病院】 瀧　正志
96	第3528号	IgA腎症（再生検症例を含めた）における病理組織分類のOxford分類と我が国の組織学的重症度分類を用いた予後予測モデルの構築	IgA腎症は我が国で難病指定の疾患となった20年以上の経過で約4割が末期腎不全に至る予後不良の疾患である。そのため、正確な予後及び治療効果の予測が必要である。IgA腎症は、病理組織所見により潜在的なリスクの検討が可能となる。組織学的分類には、Oxford分類と本邦の組織学的重症度分類がしばしば使用されているが、議論の余地がある。今回、再生検による形態学的分類の移行を観察し、heterogenousなIgA腎症を形態学的に細分化することが可能か検討する。	当院で2回以上腎生検したIgA腎症 昭和59年1月1日～ 平成28年12月31日	約50例	平成29年01月23日	平成32年03月31日	内科学 （腎臓・高血圧内科） 鈴木　智
97	第3536号	開腹歴のない絞扼性イレウスの検討	絞扼性イレウスは緊急手術を要し、癒着剥離のみで終了する場合と、壊死により腸管切除が必要な場合がある。今回、開腹歴のない絞扼性イレウス症例において、低侵襲で終わる剥離のみと、腸管切除が必要な症例を比較し、腸管切除に至る症例の危険因子を予測する。	開腹歴のない絞扼性イレウス 平成20年9月1日～ 平成28年12月31日	32例	平成29年01月30日	平成29年05月30日	消化器病センター 【東横病院】 佐々木　貴浩
98	第3538号	CT所見に基づく絞扼性腸閉塞の緊急度判定	絞扼性腸閉塞は腸管と共に腸間膜動静脈が圧迫されることによりうっ血・虚血を生じる病態であり、適切に診断し速やかに解除しないと壊死を生じる例や比較的、時間的な猶予がある例まで様々である。身体所見や血液生化学検査などの臨床所見と重症度との相関性は乏しく、臨床的に緊急度を判定することは難しい。今回の研究では、実際に手術した症例のCT所見を解析した上で、画像によるstagingを行い、適切な診断・マネージメントのための緊急度判定や腸管予後予測が可能か検証する。また、どのようなCTプロトコールを用いればそれらが達成できるかも検討する。	絞扼性腸閉塞 平成20年1月1日～ 平成29年1月31日	70例	平成29年03月22日	平成29年06月30日	救急医学 佐藤　文恵

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
99	第3542号	大動脈弁狭窄症における経胸壁3D心エコー図の有用性	硬化性大動脈弁狭窄症（AS）は、超高齢化を迎えた先進諸国において爆発的に増加している。ASの重症度指標は経胸壁心エコー図から得られる平均圧較差と弁口面積により診断されるが、近年、圧較差と弁口面積とに乖離を認める例が30%程あると報告され、また弁口面積が小さいにも関わらず、圧較差が低い患者、従来であれば中等度と診断されていた患者の予後に関しては良好であるとの報告もされてきており、一定の見解が得られていない。乖離の原因としてASによる左室肥大による一回心拍出量（SV）減少が寄与するものと考えられており、SV計測がAS重症度評価の一つとして重要な指標になっている。現在はSV計測はドプラ法を用いているが、より正確な評価法が期待されている。経胸壁3D心エコー図は現在のエコー技術の中でも最も正確なSV計測法であるとの報告がなされているが、ASにおける有用性の報告はないため、今回、検討する。	経胸壁3D心エコー図を施行した大動脈弁狭窄症 平成25年4月1日～ 平成28年12月31日	300例	平成29年02月09日	平成29年12月31日	内科学 （循環器内科） 出雲　昌樹
100	第3543号	悪性気道狭窄のCTと呼吸機能検査による気管狭窄の評価	悪性気道狭窄は悪性腫瘍により気道狭窄を生じた状態であり、腫瘍の直接浸潤やリンパ節転移などにより起こり、呼吸困難感や喘鳴、時に窒息に至る重篤な病態である。現在、当科では悪性気道狭窄に対してステント治療を含めたインターベンション治療を行っている。悪性気道狭窄の評価にはCTが有用であり、呼吸機能検査とともに病状評価には欠かせない手段である。過去の研究ではステント治療により呼吸機能が改善することは知られているが、その狭窄の程度と呼吸機能の定量的な相関については明らかでない。また、再発性多発軟骨炎ではCT上最狭窄点が呼吸機能と強く相関することからも、悪性気道狭窄についてもCT上での狭窄の程度と呼吸機能が相関するか検討したい。	悪性気道狭窄と診断され、当院を受診し、CTと呼吸機能検査を施行している患者 平成15年4月1日～ 平成28年4月30日	32例	平成29年02月09日	平成30年02月08日	内科学 （呼吸器内科） 半田　寛
101	第3545号	静脈洞血栓症における頭部ルーチンMRI撮像法の診断能の比較検討	脳静脈洞血栓症は早期診断が難しく、診断が遅れて脳出血に至ることも少なくない。本疾患のMRI診断においては造影MRIが有用であるが、何らかの検査時に静脈洞血栓症が疑われた場合に施行されるものであり、頭部ルーチンMRI検査では行われない。非造影の頭部ルーチンMRI検査で本疾患が疑われれば、早期診断につながるものと考えられるが、頭部ルーチン検査の各撮像法においては、どの撮像法のどのような所見が診断に最も有用か、また組み合わせについても明らかになっていない。本研究では頭部ルーチンMRI撮像法において、静脈洞血栓症の診断にどの撮像法が最も有用となるか、組み合わせも含めて検討する。	静脈洞血栓症 平成18年10月1日～ 平成28年9月30日	12例 （全体480例）	平成29年02月09日	平成30年09月30日	放射線医学 中村　尚生
102	第3562号	リウマチ性疾患の患者に生じた顎骨壊死の解析	骨粗鬆症治療に伴う顎骨壊死の発生は関節リウマチ患者で多いことが示唆されているが、その実態は不明な点が多い。今回、リウマチ性疾患における顎骨壊死症例を調査し、顎骨壊死を生じたリウマチ性疾患の臨床的特徴を明らかにする。	顎骨壊死 平成23年4月1日～ 平成28年11月30日	7例	平成29年02月14日	平成30年03月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 永渕　裕子

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
103	第3566号	アグレッシブリンパ腫に対するDA-EPOCH±R療法の後方視研究	アグレッシブリンパ腫患者に対し、国内で施行されたDA-EPOCH療法、B細胞リンパ腫の場合はリツキシマブ併用療法（DA-EPOCH±R療法）の有効性と安全性、ならびに治療上の問題点を多施設後方視的調査研究を行い、明らかにする。	アグレッシブリンパ腫 平成19年1月1日～ 平成27年12月31日	25例 （全体80例）	平成29年02月23日	平成29年08月31日	内科学 （血液・腫瘍内科） 富田　直人
104	第3567号	第12次ATL全国実態調査研究	本研究に参加する施設で診断された成人T細胞白血病リンパ腫・リンパ腫（ATL）の病態と、診療実態について検討するための後方視的調査研究を行う。本邦のATLの病態と診療実態を明らかにし、本疾患の診療体制整備に寄与することが目的である。	成人T細胞白血病リンパ腫・リンパ腫と診断された方 平成24年1月1日～ 平成25年12月31日	1例 （全体1000例）	平成29年02月23日	平成29年09月30日	内科学 （血液・腫瘍内科） 富田　直人
105	第3596号	がん患者における周術期口腔機能管理状況の調査	近年、がん患者に対する化学療法時の口腔内合併症の軽減や、手術時の感染症の予防のために医科歯科連携による口腔ケアが推進され、2012年からは「周術期口腔機能管理料」が新設された。しかし、当院では周術期口腔機能管理における医科歯科連携が十分といえない状況であった。そこで、歯科への紹介率向上のため周術期口腔機能管理依頼書を作成し、運用を開始したので、運用開始前後における周術期口腔機能管理状況を調査する。	悪性腫瘍に対し、手術や化学療法、緩和医療が施行された患者 平成28年1月1日～ 平成28年12月31日	200例	平成29年04月05日	平成29年12月31日	薬剤部 【多摩病院】 坂下　裕子
106	第3597号	終末期における苦痛緩和のための鎮静の現状と鎮静マニュアルの作成	川崎市立多摩病院は平成18年2月に開院した急性期医療を担う地域の中核医療機関であるが、年々緩和ケアの必要性が増加している。苦痛緩和のため鎮静が必要な終末期患者も多数いることからも、今後の課題を明確化し、鎮静マニュアル作成を目的に終末期緩和ケアにおける現状を調査する。	終末期の苦痛緩和のため鎮静が施行された方 平成27年1月1日～ 平成28年12月31日	20例	平成29年04月05日	平成29年06月04日	薬剤部 【多摩病院】 坂下　裕子
107	第3599号	当院における再発性多発軟骨炎症例の病態・治療における特徴解析	再発性多発軟骨炎（RP：Relapsing Polycondritis）は全身の軟骨組織に系統的な炎症をきたし、軟骨組織の剤弱化をもたらす希少疾患（100万人あたり3.5人）である。希少疾患であることから、その診断と治療については過去の症例報告に依存しており、確固たるエビデンスがある治療法は確立されていない。今回、希少な疾患の診断・治療を後方視的に調査し、病態の特徴及び治療方法の特徴を解析する。	再発性多発軟骨炎 平成22年1月1日～ 平成28年3月31日	40例	平成29年04月13日	平成30年03月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 殿岡　久美子

通常診療により得られた診療情報を用いる観察研究 （平成 29年　5月1日現在）

No.	承認番号	課題名	研究概要	対象疾患 （調査対象期間）	予定症例数	実施期間(開始日)	実施期間(終了日)	所属 実施責任者
108	第3602号	経肛門的イレウス管と自己拡張型金属ステントの安全性、有用性についての比較検討	本邦では大腸悪性狭窄に対する緊急手術を回避するための代替減圧術（ACD：Alternative colonic decompression）として肛門的イレウス管（TDT：Transanal drainage tube）が一般的であった。2012年から自己拡張型金属ステント（SEMS：Self expandable metallic stent）が使用可能となり、使用機会が増加しているが、TDTとSEMSの有用性と安全性を比較した報告は少ない。そのため今回、当院で施行したACDについて、TDTとSEMSの2群に分け、その有用性と安全性を比較検討する。	良性疾患、もしくは悪性疾患による大腸イレウスと診断され、ACDが施行された方 平成18年1月1日～平成28年9月30日	98例	平成29年04月13日	平成29年05月31日	内科学 （消化器・肝臓内科） 【多摩病院】 石郷岡　晋也
109	第3603号	膠原病患者における肺高血圧症治療選択	肺高血圧症（PH）と診断された膠原病患者の治療内容を後ろ向きに解析する。また、選択された治療内容による効果を確認し、検討する。これにより膠原病性肺高血圧症の各疾患や各病態に対する、適切な治療内容を明らかにする。	当科で膠原病と診断され、かつPHを疑われて右心カテーテル検査を実施された方 平成20年1月1日～平成28年10月31日	100例	平成29年04月13日	平成33年03月31日	内科学 （リウマチ・膠原病・アレルギー内科） 山崎　宜興
110	第3604号	小児病棟における動物介在療法	犬を用いた動物介在療法（AAT：Animal assisted therapy）を2015年に大学病院として初めて開始してから2年間が経過し、小児を含む96人の方に対しAATが施行された。今回、重い病と闘う患者およびその家族へ、情緒的安定と闘病意欲向上を促進させることを目的に、小児患者を対象としたAATにおいて特徴的な経過をたどった5例について報告し、小児患者におけるAATの有用性を検討する。	当院に入院された患児のうち、AATを施行された方 平成27年2月1日～平成20年2月28日	7例	平成29年04月13日	平成29年12月31日	外科学 （小児外科） 長江　秀樹